2023_1211「晩秋の森を見上げて（動画)」日々の理科 3413 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

小石川植物園温室のショクダイオオコンニャクを見たあと、植物園奥のスズカケノキの森に行きました。自分専用の椅子持参で「チェアリング」をするためです。暦の上では「冬至」が近いのですが、小石川植物園の黄葉・紅葉は、近年１２月に入ってからが一番美しいと思います。

そもそも近年、東京には「正式な冬」は来なくなりました。気象庁の基準では「最低気温が０℃以下の日」を「冬日」としているのですが、それが一日もない年が増えているのです。東京の季節の巡りは「春夏秋冬」ではなく「春夏夏秋」となっているような気がします。

落葉樹も「落葉する時期」が遅くなり、「落葉している期間」も短くなっています。特に都内のイチョウは顕著で、１２月上旬～中旬は黄葉の見頃、クリスマスになっても年を越してもまだ葉が残っている樹も見かけます。そもそも落葉樹が冬を前に葉を落とす理由の一つは、雪の重さから枝を守ることにあります。東北地方に多いブナの樹は、初雪までに葉をすべて落とさないと、雪の重さで太い枝が折れて、樹そのものが枯死することがあるそうです。東京には積雪そのものがほとんどなくなったので、落葉樹が冬を前に葉を落とす意味が薄れているのです。イチョウに限らず、東京の落葉樹は、半ば「常緑樹化」しているように思えます。

温暖化の影響の話はさておき、森の奥に椅子を置いて木々の樹冠のほうを向き、時々舞い降りる落ち葉を眺めていると、ここが文京区の真ん中であることをすっかり忘れてしまいます。

(2023 年 12 月中旬／小石川植物園)